

伝統食の背景にある文化を知ろう

米の儀礼に込められた日本人の心

稲作の伝来以来、米を「特別の食、べ物」として意識してきた日本人。われらの祖先は、米とその背後に、いったい何を見てきたのだろうか？米にまつわる祭礼を通して、伝統食の背景にある文化の姿を神主でもある民俗学者、神崎宣武さんに語ってもらった。

旅の文化研究所所長
神崎宣武

●かんざき・のりたけ 1944年、岡山県生まれ。宮本常一に師事したのち、国内外の民俗調査・研究に従事。岡山県宇佐八幡神社宮司。主な著書に『盛り場の民俗史』『まつり』の食文化』『江戸の旅文化』『しまりたりの日本文化』など。

稲魂に見いだした生命力

米と日本人との関係は、そもそも「コメ」という呼び名に象徴的に表わされているのではないだろうか。「中世の文献を見ると、「久しい米（久米）」と書いて「クメ」と読ませたものがあります。久米というと『今昔物語』に出てくる久米仙人が有名

ですが、もともとは命が久しく続いていくという意味です。ほかにも、「米」と書いて「チカラ」と読ませたり、「トシ」と呼ばせたりしている。トシは「年取り」などと言うときの「年」、つまり循環する生命という意味で、後世では「稔」と漢字を当てることもありました。このように古くから米に対して命や力、稔りといったイメージをいだ

いてきたことを考えると、どうやら日本人の米に対する思いは、他の民族と比べてことのほか強いのではないかと思えてなりません。米の原産地や日本への渡来ルートをめぐっては諸説あつて定まりませんが、もともと南方産の植物であることは確かです。それが北へ北へと入ってきて、日本列島に定着しました。そこにいたるまで、どれだけの艱難辛苦があ

つたことか。私たちの祖先たちは、日照りや旱害、冷害、洪水といった困難を乗り越え、原産地から遠く離れたところで稲という貴重な作物を大切に育ててきたのです。

こうした稲作の北限であったという事情に加えて、日本の風土では原産地である熱帯地方のような二期作ができないことも、日本人の米への思い入れをいっそう強めたのではないかと思えます。収穫できるか、できないか、一年に一回だけの勝負。幸いその年は無事に収穫できても、絶えず次の年の再生を願わねばなりません。

そこで、稲に宿る精霊「稲魂」に對して、次の再生を願って供え物を、儀礼を行なうようになったのです。丹精込めて育てた米を供えるだけでなく、さらに手間をかけて酒を造って御神酒として供えたり、餅

を御鏡として供えたりします。

耕耘機が導入された現在はまだほとんど痕跡をとどめていませんが、かつては、農家では正月に「田始め」や「田打ち」と呼ばれる儀礼を行なっていました。家長が鋤で打つ真似をして豊作を願い、その年の仕事始めとする。稲魂の持つ生命力や再生力をうやまい、年に一度の稔りを心から願う気持ち、日本人のあいだで広く共有されていたのです。

米の靈力を引き出す占い

米と日本人の関係を考えるうえで、語源的な問題と並んで注目しておくたいのが、占いです。古くさくて非科学的だと見なされ、時代とともにどんどん衰退してしまいましたが、もともと占いは農耕儀礼と密接な関係にあり、そこでも米が用いられる

例が多かったと推察されます。いまではもうほとんどなじみ薄くなりましたが、かつては「米占」や「粥占」で豊凶を占う神事が全国各地で行なわれていました。米の持つ靈力で、豊穰を願うのです。

米占にも幾つかのタイプがありますが、まず神懸かりをして米粒を高く打ち上げ、それを空中で攪んで米粒の数を数えて占うかたちがよく知られています。日本列島と同様に稲作の北限地である朝鮮半島にも米占があり、打ち上げた米粒をお盆で受け止めて、その景色を見て占います。

現存している米占や粥占は神主が行なうものがほとんどですが、私の郷里である吉備地方などでは、神樂を舞うときに神懸かりして、神樂太夫（神樂師）が行なう場合もあります。おみくじから連想するのか、神社における占いは巫女がやるものだと思